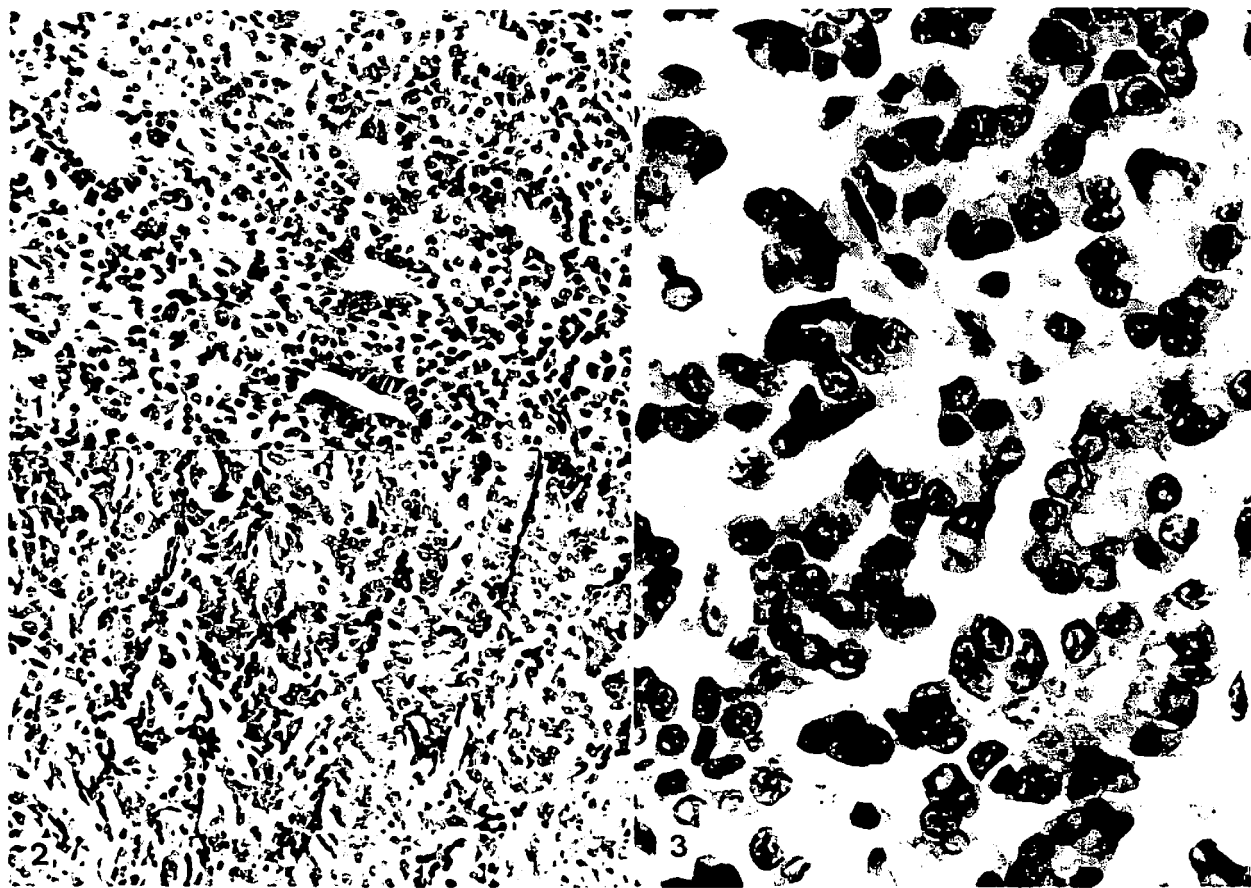


イヌの甲状腺癌

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第17回獣医病理学研修会標本No.272



動物：マルチーズ，雄（去勢），8才6ヵ月。

臨床：昭和51年3月開業医のもとで腋窩部の皮下腫瘍を摘出するが詳細は不明。摘出手術後に全身の痙攣，疼痛がみられ，コーチゾン，精神安定剤を連続投与するが症状の軽減はみられなかった。11月末より食欲不振，嚥下困難，嘔吐などの症状がみられるようになり，12月10日斃死した。

剖検所見：右側の咽頭部皮下（正常な甲状腺の位置）に拇指頭大の乳白色，被膜に被包され，充実する腫瘍がみられ，又該腫瘍に続いて食道右側，気管に接して小指頭大以下の種々の大きさの腫瘍が多発していた。腫瘍の断面は乳白色髄様で，出血する部位もみられた。食道壁は肥厚し，咽頭より頸部食道壁の上部1/3の部位に米粒大～小豆大の乳白色の充実する結節が多発し，粘膜面は顆粒状を呈していた。

組織学的所見：頸部腫瘍は比較的被膜に近い部位にやや丈の高い細胞からなる腺胞および濾胞構造がみられ（写真1，×100），胞体の明るい大型の細胞が腺胞を形

成し，弱好酸性物質の貯溜する場所もみられる。また非常に丈の高い立方上皮様の細胞が細い結合織に沿って柵状に配列する像がみられる（写真2，×100）。部位によっては原形質に乏しくやや小型の細胞が密集し，不完全ながら小胞，rosette 構造を形成する像が多くみられる（写真3，×400）。また腫瘍間質には硝子様変性，コレステリン，石灰塩の著明な沈着を認めた。

咽頭部，食道壁の結節および肺も上記の小型細胞により構成され，一部には小胞構造を示す像もみられ，頸部腫瘍の転移病巣と診断した。

提出標本の腫瘍の被膜近くに圧迫され，腫瘍性増殖像とは明らかに所見を異にした腺胞構造を示す部位が認められ，本来の甲状腺組織が残存するものと考えられる。

診断：本症例は比較的分化した腺胞構造を一部にはみえるが，多形性を示す単純癌（未分化癌）の構造の部位も多くみられ，甲状腺原発のanaplastic carcinomaと診断する。